ベトナムにおける「海外フィールド演習」の成果と課題
―フエ市でのパイロットプログラムの実施を通して―

筒井一伸*・仲野　誠*・永松　大**・
グエン クアン トゥアン**・ブイ ティ トゥ***・レ ディン トゥアン***

A Report on the Outcomes of an "Overseas Fieldwork" Pilot Program in Hue City, Vietnam

TSUTSUI Kazunobu*, NAKANO Makoto*, NAGAMATSU Dai**,
Nguyễn Quang Tuấn ***, Bùi Thị Thu***, Lê Đình Thuận***

キーワード：海外地域調査，森林調査，集落調査，グビン山，フエ科学大学
Key Words：Fieldwork in foreign countries, Forest Research, Community Research, Ngu Binh mountain, Hue College of Science

Ⅰ　はじめに

地域学部ではこれまでも，学科単位，教員単位で国際交流に関わる注目すべき取り組みを行ってきた。例えば地域教育学科を中心に2005（平成17）年からはじめられた韓国・春川教育大学校との短期交流事業（小笠原，2010）や地域文化学科のKip Cates教授が中心となって1999（平成11）年から行っているThe Asian Youth Forum（AYF）（Thorpe Todd，2009）などが挙げられる。地域学部ではこれらの既往の取り組みを基礎にしつつ，より体系だった国際交流体制を確立するため，2010（平成22）年度より学部長直属の「国際交流ワーキンググループ（座長：永松）」を立ち上げ，翌2011（平成23）年度には同じく学部長直属の「国際交流委員会（委員長：足立和美地域教育学科教授）」に発展させて体制づくりを行ってきた。

一方，学科横断の教員有志で「地域学部国際交流体系化プロジェクト」を立ち上げ，地域学部と交流協定を結んだベトナム・フエ科学大学について学術交流展開に向けたシーズ・ニーズ調査を行い，その結果から今後の展望について報告をおこなった（永松ほか，2010）。この中で永松ほかは，地域調査のスキルを習得した地域学部の学生に海外での地域調査や活動の機会を提供することを提案した。これは，海外の「地域」を観察・比較し，その地域の諸課題や地域資源を理解することに力点をおき，現地教員による講義とエクスカーション，そして入門的な調査を中心とした短期のプログラム「海外フィールド演習」を新たに設ける構想である。この構想は2010（平成22）年11月18日の地域学部教授会で国際交流ワーキンググループの成果報告の一部として公表された。その背景

*　鳥取大学地域学部地域政策学科
**　鳥取大学地域学部地域環境学科
***フエ科学大学地理地質学部

としては，①地域学部学生および教員の国際交流推進，②地域を見つめる目の複眼化と地球地域学という発想の醸成，そして地域学部として積極的にかかわっている③北東アジア研究の推進，がある（図１）。

この中でも②に注目すると，近年，「東アジア」，「北東アジア」，「環太平洋」等の地域をキーワードにしてアジア諸国との関係が密接になってきていることがある。鳥取大学が所在する鳥取県においても，環日本海地域の自治体における海外姉妹都市との政策交流や観光誘致，小・中・高校やNPO団体等での文化交流，教育交流や環境保全活動，アジア地域に工場を持つ企業におけるアジア人向け技術研修など，様々な分野，形態，規模での国際交流や国際協働活動が頻繁に行われている。一方で，人口増加，経済格差，黄砂や海洋ごみの漂着などアジア諸国の広範囲にわたる地域課題に対する共通認識も深まっており，その解決に向けて国際的な共同調査や共同研究が実施されている。こうした社会状況を背景にして，海外の地域課題の解決や地域発展に向けた諸活動を，その地域の関係機関や人々と協働して実践し，その地域の再生や発展に貢献する，「インターリージョナルな活動」ができる協働人材の重要性が高まっている。

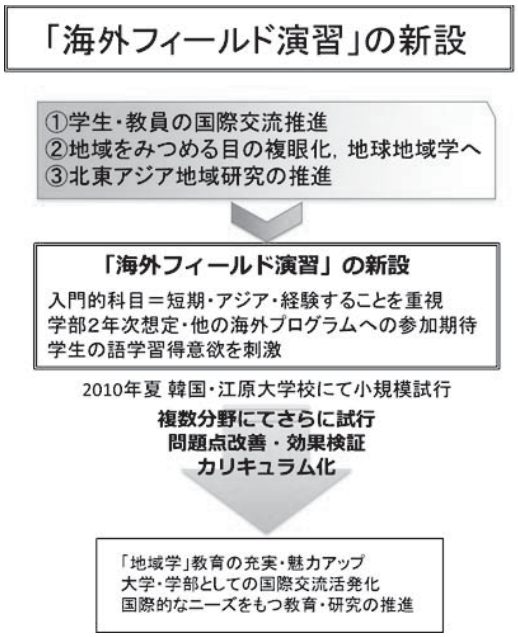

図１　海外フィールド演習の意義

このような学内外の状況を踏まえて，2010（平成22）年８月22日から８月29日の８日間の日程で韓国・江原大学校における海外フィールド演習が試行された。この成果（田川・永松，2010）をもとに2011（平成23）年度には学部国際交流委員会や有志教員がプログラムのブラッシュアップを行うと同時に，韓国以外でのプログラムの試行が検討された。また海外フィールド演習の科目新設にむけた議論が教務部会で行われ，その結果，海外フィールド演習は2012（平成24）年度入学生から適用される専門科目として設置された。

一方，筒井が学術交流協定の窓口教員をつとめるベトナム社会主義共和国のフエ科学大学と地域学部との部局間学術交流協定が2011（平成23）年３月24日にフエ大学および鳥取大学との大学間学術交流協定になり，さらに2011（平成23）年11月１日に学生交流の覚書も両校で交わされた。これを受けて今年度のパイロットプログラムをベトナム・フエ市で行うこととなり，2012（平成24）年３月４日から３月11日までの８日間の日程で実施した。本稿ではベトナム・フエ実習の企画から準備までの過程，実習内容とその成果と課題について報告し，海外フィールド演習の充実に向けた展望について述べる。

Ⅱ　海外フィールド演習実施地域の概要

１．フエ市およびフエ大学の概要

フエ市（Thành phố Huế）はベトナム中部地方に位置し，ベトナム最後の王朝グエン朝があった古都である。人口は338,994人（2010年），トゥアティエンフエ省（Tỉnh Thừa Thiên - Huế）の省都

である。面積は70.99km^{2}で27の行政区（Precinct / Phường）が置かれている。市街地はフオン川（Sông Hương）に沿って，左岸に旧市街，右岸に新市街が広がる。旧市街は碁盤目状の街路がみられる方形都市で，新市街には現在の都市機能がおかれている（図２）。グエン朝時代の宮殿や帝廟は，中国様式やフランス様式，またその折衷様式を取り入れた独特の建造物で，貴重な文化財として後世に継承されている。多くはベトナム戦争期に破壊されてしまったが，その戦禍をまぬがれたものは1993（平成５）年に「フエの建造物群」として世界文化遺産に登録された。

今回の海外フィールド演習の受け入れ校となったのはフエ大学（Hue University /Đại Học Huế）に属するフエ科学大学（College of Sciences, Hue/Trường Đại Học khoa học Huế）である。永松ほか（2010）に詳述される通りフエ大学は7つの大学（College/Trường Đại）と３つの学部（Faculty/Khoa），および1つの分校などから構成され，フエ科学大学はフエ大学の中の一つの大学である。フエ科学大学は13の学部および５つのセンターから成っている。今回の海外フィールド演習パイロットプログラムの実施にあたっては，地理・地質学部にコーディネートを依頼し，プログラムの専門性を勘案して生物学部と社会学部からも協力を得た。

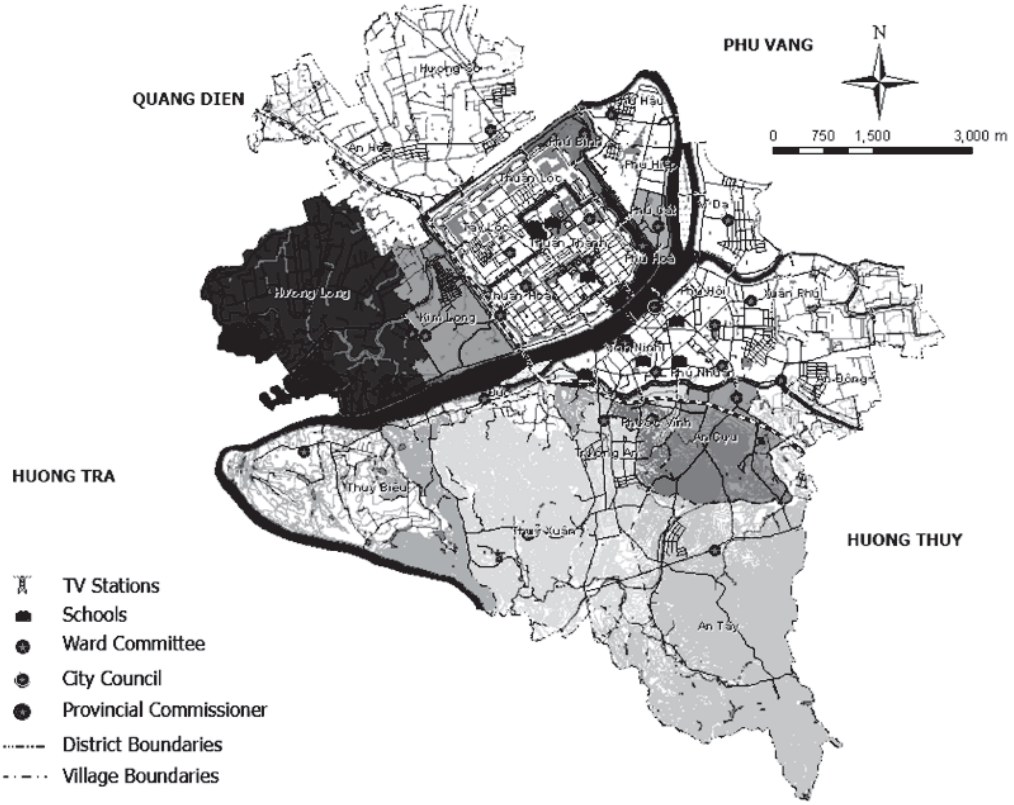

図２　フエ市の概観

2. 調査実施地域の概要

今回の海外フィールド演習では自然環境に関する調査プログラムと集落社会に関する調査プログラムの双方を行うため，フエ市の市街地ではなく郊外に位置するグビン山（Núi Ngự Bình）およびその周辺集落で地域調査を実施した。グビン山はフエ市街地から見て南南東に位置し，宮殿からは約５km，フエ科学大学からは約３kmであり，自動車でおおよそ10分程度の距離にある。グビン山周辺は市街地から近いが，農地なども広がる近郊農村地帯である（図３）。グビン山はフオン川と並んでフエのシンボルであり，フエのことを二つのシンボルの名前からフオング（Hương Ngự）地方と呼ぶこともある。標高は105mでおおよそ東西方向に約400mのほぼ平坦な山頂が広がる（図４）。頂上付近はマツの保護林が14.5ha広がっており，山麓には数千もの墓地が広がる。山頂からはフエの街並みだけではなく，チュオンソン（アンナン）山脈や南シナ海も望むことができる。グビン山の西側にはバータン山（Núi Ba Tầng），北東側にはタムタイ山（Núi Tam Thai）という二つの小さな山がある。とくにバータン山は公園化されており，市民の憩いの場ともなっている。

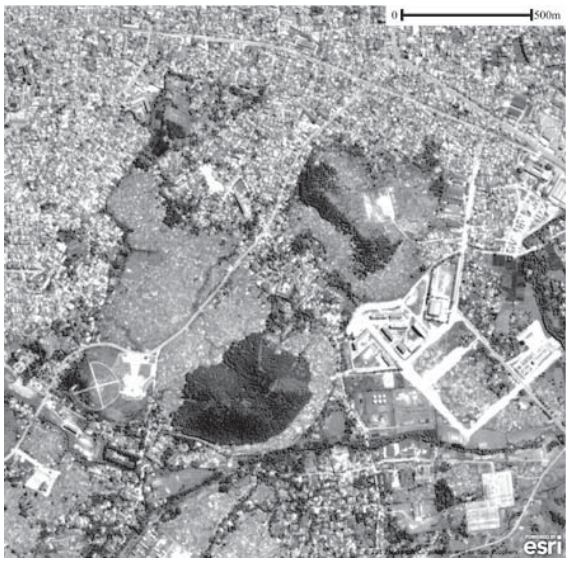

図３　グビン山周辺の景観

出典：ESRI ArcGIS Explore online より転載
(c) 2011 Microsoft Corporation and its data suppliers

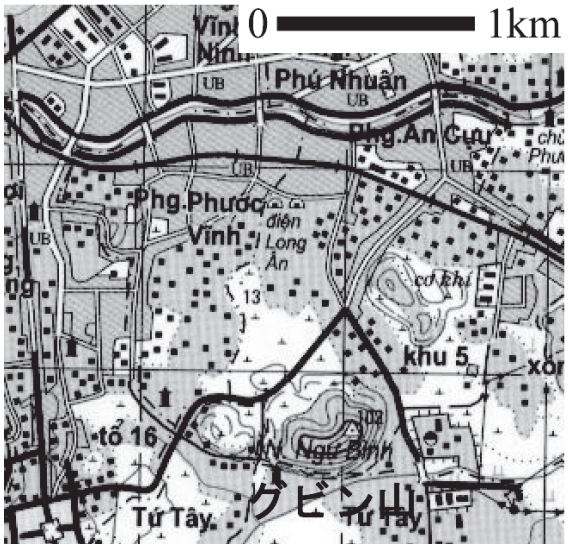

図４　グビン山周辺の地形

原図：1:50,000 地形図　TP Huế, E48-96-A（2002 年）

グビン山はアンタイ区（Phường An Tây）とアンクー区（Phường An Cựu）の境に位置する。アンタイ区はフエ市の都市拡大に伴い，都市化が進展した農村地域であるトゥイアン行政村（Xã Thủy An）が2007年に分割されて設置された比較的新しい行政区である。人口は7,034人（2010年），面積は1035.2haで，行政区分が農村地域から都市地域に変わった今でも面積の約45%が農用地，農業従事者比率は約32%と，農業や墓石製造などが盛んである。一方，アンクー区は1983年に設置された行政区である。人口22,620人（2010年），面積257.0haで農用地は27.7ha（約10.8%）に過ぎない。アンクー区にはベトナムの最重要幹線である国道１号線が貫いており，またフエ市からベトナム南部方面へのバスターミナルも置

かれるなど交通の要所である。アンクー区では国道１号線沿いに多くの人口集積が見られ，国道１号線から入ったグビン山近くにも集落はあるもののむしろ農村的な性格を見せる。しかしながらグビン山近くにフエ大学に属するフエ外国語大学が2005年にキャンパス移転をするなど，都市化が進行しつつある。

Ⅲ　海外フィールド演習のプログラム設計

１. 全体プログラムの設計

海外フィールド演習は地域を学ぶ（地域に学ぶ）という地域学部の専門性を一定程度担保しつつ，短期間で海外を経験するプログラムとして設計される。筆者らのこれまでの取り組みを通して，地域学部学生には，語学に自信はないが海外を「経験」したいという需要は相応にあると考えられる。そこで，地域学部教育で身に着けた知識や技術が海外でも応用可能であるということを学生に体験してもらうことで，海外への心理的ハードルを下げ，国際交流プログラムへの参加意欲や語学学習意欲の向上を生むことを目標として，全体プログラムの設計がなされた。

本プログラムでの使用言語は英語とした。ベトナムの公用語はベトナム語であるが，社会主義国であったこともあり，特に北部を中心にエリート層の「外国語」はロシア語との位置づけがなされてきた。1990年代以降は市場経済体制の導入と全方位外交の影響から英語教育が浸透しはじめてはいるが，他の東南アジア諸国，特にネイティブに近いフィリピンやシンガポールと比べると学生の英語力は必ずしも高くはない。したがって本プログラムでは英語能力の向上はそれほど期待できない。むしろ英語が母国語ではない学生同士，どのようにコミュニケーションをとるかという，語学力とは異なるコミュニケーション能力の向上が期待される。

海外フィールド演習の実施にあたっては2011年８月より筒井とフエ科学大学の受け入れ担当者であるトゥアンとの間で企画案の調整をはじめた（表１）。演習実施地域は当初３候補あり，グビン山以外にもEco Villageとして開発をすすめるテゥイビエウ行政村（Xã Thủy Biều），やフエ市周辺工芸村（Làng nghề）なども候補となったが，調査プログラム担当を，生態学を専門とする永松と社会学を専門とする仲野が担うこととなったため，両者がともに調査を行いやすいという観点からグビン山を演習実

表１　準備スケジュール

日付	内容
2011年5月	学長経費「地域学部「海外フィールド演習」創設に向けた調査と試行」の採択
2011年8月11日～13日	筒井のベトナム出張に合わせてフエ科学大学との打ち合わせを開始
2011年8月29日～10月26日	トゥアンが客員准教授（JSPS外国人招へい研究者）として鳥取大学において研究活動，この期間中に打ち合わせを継続（トゥアン帰国後もメールによる打ち合わせを継続）
2011年11月1日	フエ大学との「学生交流の覚書」の締結
2011年11月	引率教員の決定
2011年12月7日	参加学生の募集開始
2011年12月16日	地域学部長よりフエ科学大学国際交流室長宛に協力依頼状を送付
2012年1月13日	参加学生の仮申し込み締め切り（仮申し込み12名）
2012年1月15日	演習実施場所をグビン山および周辺集落に確定
2012年1月18日	海外フィールド演習（ベトナム・フエ）説明会開催（仮申し込み学生との面談等の実施）
2012年1月23日	参加学生の正式申し込み締め切り（正式申し込み6名＝参加者確定）
2012年1月-2月	航空券・宿泊場所・移動手段の手配・確定（※パスポート未取得学生は申請）
2012年2月10日	本プログラムに係る緊急連絡体制の確立
2012年2月16日	海外渡航前危機管理セミナー（講師：竹田洋志　国際交流センター副センター長）
2012年2月28日	フエ科学大学より以下の関係各機関に対して調査許可申請（※調整は12月より継続的に実施）①フエ市フオックビン区・アンクー区・アンタイ区の人民委員会（行政）および警察，②ティエンフォン林業国家有限会社（グビン山の森林を管理する会社）
2012年3月3日	事前勉強会
2012年3月4日	出発

施地域として設定した。ベトナムでは外国人が調査を行う際にはフエ市の関係行政区の人民委員会や警察に対して，カウンターパートであるフエ科学大学から届出が必要となるため，12月に地域学部長名でフエ科学大学へ公式に依頼状を送付し，ベトナム側でも諸手続きの準備を進めることとなった。

またこれと並行して参加学生の募集も12月７日から冬季休業期間を挟んで１月13日までの間で行った。その結果，募集は5名程度としたにもかかわらず仮申し込みは４学科から12名があった。説明会を１月18日に開催し，プログラム内容への関心度などを通じて参加者を６名とした（表２）。内訳は地域政策学科２名，地域文化学科１名，地域環境学科３名で男女ともに３名ずつであった。また半数の３名には海外渡航経験がなく，海外フィールド演習の役割である海外への入門的科目としての意義がこの時点で認められた。２月16日には鳥取大学が制定している「国際交流危機管理マニュアル」に基づき，国際交流センターの竹田洋志副センター長を講師とする危機管理セミナーを開催し，パイロットプログラムにおける緊急連絡体制の構築も行った。

プログラムは航空券の手配状況や担当教員の公務の状況などを勘案して2012年３月４日から３月11日まで８日間の米子空港発着スケジュールを組んだ（表３）。フライトスケジュールの関係で往路はホーチミンシティ経由でフエに入るルートとなり，ホーチミンシティでの１泊が必要となったためフエ市入りは翌３月５日となった。計画ではこの日にフエ市内のエクスカーションを予定していたが，ホーチミンシティからフエへのフライトが３時間程度遅延したため，エクスカーションは中止となった。３月５日から９日までは，集落社会に関する地域調査と自然環境に関する地域調査の２つのグループ

表２　参加学生の一覧

	所属	性別	学年	調査グループ	海外渡航経験
1	地域政策学科	男	3	集落社会	あり
2	地域政策学科	男	3	集落社会	なし
3	地域文化学科	女	3	集落社会	あり
4	地域環境学科	女	2	自然環境	なし
5	地域環境学科	男	3	自然環境	なし
6	地域環境学科	女	2	自然環境	あり

表３　海外フィールド演習スケジュール（計画）

日付	行程
2012年3月4日	鳥取大学10:30集合⇒米子空港（鳥取大学バス） アシアナ航空OZ163　米子15:00⇒ソウル16:40 アシアナ航空OZ735　ソウル19:15⇒ホーチミンシティ22:40 宿泊：Thien Vu Hotel
2012年3月5日	ベトナム航空VN1372　ホーチミンシティ10:50⇒フエ12:10 午後：フエ市内エクスカーション（フエ科学大学公用車） ウェルカムパーティー 宿泊：Nguyen Hue Hotel
2012年3月6日	午前：フエ科学大学にてレクチャー 午後：フィールドエクスカーション（タクシー） 宿泊：Nguyen Hue Hotel
2012年3月7日	全日：フィールド演習（移動：タクシー） 宿泊：Nguyen Hue Hotel
2012年3月8日	全日：フィールド演習（移動：タクシー） 宿泊：Nguyen Hue Hotel
2012年3月9日	午前：演習結果のとりまとめ 午後：報告会 宿泊：Nguyen Hue Hotel
2012年3月10日	全日：ホイアンほかエクスカーション（マイクロバス借り上げ） アシアナ航空OZ756　ダナン23:40⇒ソウル05:50+1 宿泊：機内泊
2012年3月11日	アシアナ航空OZ164　ソウル12:30⇒米子14:00 米子空港⇒鳥取大学17:00解散（鳥取大学バス）

表４　フエ科学大学からの参加者の一覧

	所属	性別	身分	調査グループ
1	地理地質学部	女	学部生	自然環境
2	地理地質学部	女	学部生	集落社会
3	地理地質学部	女	学部生	集落社会
4	地理地質学部	男	学部生	自然環境
5	地理地質学部	男	学部生	集落社会
6	地理地質学部	女	修士学生	集落社会
7	地理地質学部	女	修士学生	自然環境
8	地理地質学部	女	講師	集落社会
9	地理地質学部	男	講師	自然環境
10	地理地質学部	男	講師	自然環境
11	地理地質学部	女	講師	集落社会
12	社会学部	女	学部生	集落社会
13	生物学部	女	講師	自然環境
14	生物学部	男	学部生	自然環境

に分かれて実際の演習を行った。宿舎については当初は大学が持つ学生寮を使用することも考え調整をしたが，英語が通じず緊急時の対応が難しいため，フエ科学大学近くの英語が通じる民間ホテルを利用することとなった。復路はベトナム中部のエクスカーションを兼ねて，フエ市から100kmほど南に下った，フエ市から最も近いダナン国際空港からのフライトを利用した。

本プログラムでは使用言語を英語とはしたものの，実際の地域調査において地域住民へのインタビューなどを英語で行うことは不可能である。そのため，フエ科学大学で英語が比較的堪能な学生，院生および若手教員の本プログラムへの参加を依頼し，日本人学生同様に調査グループに属して共同調査を行うと同時に英語とベトナム語の通訳も担うこととなった。参加者は，本プログラムの窓口となっている地理地質学部のみならず，仲野，永松の専門にも比較的近い社会学部や生物学部からも得られた（表４）。

２. 集落社会に関する調査プログラム

集落調査グループはグビン山麓の路村を調査地に定めた。今回の基本的な調査のスタイルは質的地域調査である。まずは自分の足で現地を歩いて気になることを入口にして自分なりの問いを立てることにその眼目をおく実習を行った。

今回のこのグループの目的は，「正しい答えを出すために有効なデータや資料を集めることができるだけでなく，調査を進めていくなかで問題そのものの輪郭や構造を明らかにしていくことができる」（佐藤，2002，p.86）という地域調査の特徴のひとつを実感することであった。つまり，問いを立てて，それを明らかにするためにデータを収集し，データを分析して結論を出す，というようにひとつの調査を完結させることがその目的ではなく，「現地を歩いて，気になったことをもとにして意味のある問いを立ててみる」という，あるひとつの調査の最初の段階を経験することが今回の目的なのである。

つまり，今回の実習ではあえて調査を完結させず，調査の最初の部分（問いを立てること）に作業を集中させたということだ。その大きな理由はこの度の調査における時間的制約と言語的制約である。質的地域調査は当事者の生活世界を記述しながら，それにもとづいて意味のある問いを立てていく。そのためには当初の素朴な疑問にもとづくデータ収集をし，そのデータを分析しながら当事者のリアリティに近づき，問いを構成していくことになる。データとしての語りを分析することも多く，その作業は非効率的で多くの時間がかかるのが通常である。今回の実習では実質的な調査期間は２日間であった。以上の理由により，この実習では意味のある問いを立てることをその目的とした。

調査のイメージは図５のとおりである。図５の“Style A”は最初の問題設定にもとづいてデータを集め，分析し，結論を出すやり方である。今回の実習で経験したのは“Style B”の方法である。最初の素朴な問い（Initial Question）をデータ収集と

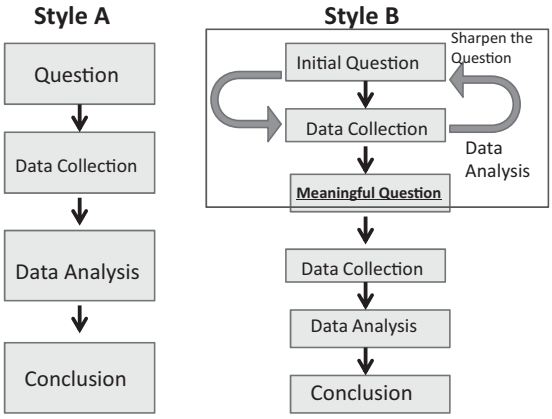

図５　調査のふたつのイメージ

それに基づく議論を繰り返すことによって「意味のある問い（Meaningful Question）」に鍛え上げていった。今回の実習では，時間的制約が大きかったので，より「意味のある問い」に近づくこと，あるいは「問いを構造化」していくこと（問いを立てること）のみを訓練の目的とした（図５“Style B” の実線で囲われている部分）。そして問いに対する結論は導き出せなくても，仮説を提示して，実習をひとまず形にすることにした。

集落調査グループ内では，日本人学生１名とベトナム人学生２名からなるサブグループを3つつくり，それぞれが個別の事例を設定してこの実習を実施することとした。

３. 自然環境に関する調査プログラム

前述のように海外フィールド演習は，地域学部で行っている地域調査のトレーニング経験が，広く海外でも応用可能である旨を体験させることを目的としている。しかし,「地域調査実習」をはじめとした学部でのトレーニングの多くは，学生本人の興味・関心に基づいた少人数グループ単位で別内容の実習となっているため，学生が得た知識やスキルはそれぞれ異なっている。このため，さまざまな学生が参加する「海外フィールド演習」のプログラムは，単純に学部での地域調査トレーニングそのものを，海外の「地域」に置き換えるだけでは成立しない。このトレーニング内容の違いをどう活かすかがカギとなる。

海外フィールド演習の試行で自然環境に関するプログラムを行うのは，2010年の韓国・江原（田川・永松 2011）についで２度目であった。韓国・江原では，参加した６名の学生に同一行動をとらせた。ほとんどが生態学に関するトレーニングを受けていなかったため，自然環境面では，江原大学演習林や自然公園を見学し，韓国の森林と日本の森林の違いを考えさせる一般的なプログラムを組んだ。演習の現地報告会では６名がそれぞれ報告内容を分担し，生態学のトレーニングを受けていた学生が，自然環境面の報告とりまとめを担当することとし，一定の成果を得た。

今回の演習では，異なるトレーニング経験を持つ学生に対応しつつ，韓国・江原でのプログラムを一歩進めることを目標とした。プログラムを担当する永松の専門分野である森林に関する野外調査を実施し，データ処理に基づく考察を行うことを目指した。これに最適なプログラムとして，2011年の地域環境学科地域調査実習でとりくんだ人工林の「森の健康診断」（蔵治ほか，2006）を今回の演習に適用した。「森の健康診断」でマニュアル化された調査票を用意し，計測を中心とした野外実習プログラムを準備した。今回は担当した３名のうち，1名が実習経験者であったため，野外実習では，この学生が未経験の学生を導くことで調査をスムーズに進行させることを想定した。ただし，今回の海外フィールド演習の日程は，国内での調査実習の成果報告会前のタイミングであったため，とりまとめについての実習経験者のアドバンテージは期待できなかった。このため今回のとりまとめは学生３人で分担することにした。自然環境グループの他の２名は,「森の健康診断」の経験はなかったが，それぞれ自然科学のトレーニングを受けてきた学生たちであった。地質や植物の人間活動との関係を学んできた彼らには，これまでに得た知識や経験との比較から現地の森林を考察するよう指導した。

初めて訪れる場所で，活動できるのは２日間，天気に恵まれない可能性もあるので，調査表は１回２時間以内に終わるものとして，時間が許す限り繰り返すことを基本にプログラム全体を計画した。

Ⅳ　地域調査の実際

１. 集落社会に関する調査の実際

ａ. テーマの設定

まず地域調査の実質的な初日の３月６日にフエ科学大学で当該地域の概要のレクチャーを受けたあと，集落調査グループと環境調査グループ全員でグビン山およびその麓の村のエクスカーションを実施した。このエクスカーションによって，当グループの調査テーマとしては，次のようなことが挙げられた――この村の周辺に広範に広がっている墓地に関連すること（墓地の歴史，墓石職人のこと，村の人びとの死生観，埋葬の方法や文化など），線香をつくっている家のこと，村と村の境界について，道路沿いにたくさん並ぶ小さな小売店について，道路沿いにいくつか見られたインターネットカフェのこと，木々の根元にみられる何らかの信仰のありかたについて，この地域にある外国語大学と地域との関係，行商を営む人たちについて，などであった。

写真１　調査テーマについて話し合う学生たち

（2012 年 3 月 6 日撮影）

その後大学に戻り，これからの調査計画の確認，調査のグループ分け，そして調査テーマについて話しあった（写真１）。集落調査グループには３人の日本人学生がいたが，それぞれにベトナム人学生を２人ずつ配属し，合計３人のグループを３つつくった。テーマはそれぞれのグループでひとつずつ設定し，それにもとづいて調査をすることにした。日本人とベトナム人の教員は３グループ全体を見渡しながら，適宜助言をした。

写真２　ミーティングをする学生たち

（2012 年 3 月 7 日撮影）

日本人とベトナム人の学生全員のなかで，この質的フィールドワークの調査法（図５の“Style B”）の経験があるのは日本人の学生１名だけであり，その他の学生にとっては，日本人の学生２名も含めて，初めての調査方法であった。そのため，3月７日からのグループ調査開始の前日にこの調査法について，筆者が学生たちにレクチャーを実施した。学生たちは概ね調査法のポイントを理解したように思えた。

調査テーマは，前述の通り多くの候補があった。これらの候補を念頭において学生たちが話しあったところ，各グループがそれぞれ異なる小売店を調査し，集落調査グループ全体としてこの路村の小売店を事例にした共通テーマを設定することに決まった。まずはそれぞれの小売店の概要を調べ，そのデータをもとにディスカッションを繰り返し，「小売店への素朴な関心」を「意味のある問い」に展開していくことにした。

まず各グループ間共通の質問として設定したことがらは次のとおりである。当該小売店の歴史，店の担い手，売られている商品，客について，将来の願い，である。これらの基礎項目とそれらに関する発展的なデータをもとに調査とディスカッションをとおして「意味のある問い」を立てることにした。

b. 調査

調査日程は次の表５とおりであった。

集落調査グループとしての調査初日の３月７日，午前７時から１時間ほど，調査法と調査テーマの確認を行った（写真２）。前述のとおり，その前日に質的フィールドワークの特徴や問いを構造化していくこと自体の意義について確認していた。そのためこの実習の目的とその方法については既に共通理解がなされたつもりだったが，この朝のミーティングで必ずしもそうではなかったことが判明した。ベトナムの学生及び教員からは「あらかじめ詳細な質問紙を作成し，一店舗あたりにかける調査時間はできるだけ少なくしてより多くの店舗の調査をすべきだ。その方が効率的だ」という意見が出された。

これは問いを構造化していくことに実習の主眼を置くことの意義が十分に理解されていなかったために表明された違和感だろう。あるいは数量的調査のスタイルに慣れ親しんでおり，効率性を重視していたためかもしれない。さらなる話し合いによって，今回はあくまでも調査の訓練を経験することが重要なので，聞き取り調査を重ねながら問いを構造化していくプロセスそのものに主眼を置くことを確認した。

表５　集落社会調査グループの実習日程

日時	実習内容
3月6日	
08:00～09:30	・ベトナムと調査地の概要のレクチャー
09:30～10:30	・集落調査グループの質的フィールドワークの方法論とねらいのミーティング
14:00～16:00	・集落調査グループと環境調査グループ合同の調査地のエクスカーション（実際に現地を歩き，自分の調査事例と出会う）
3月7日	
07:00～08:00	・質的フィールドワークの方法論とそのねらいの確認（ホテルのロビー）
08:00～11:00	・集落調査グループのサブグループごとの地域調査（1回目）
11:00～13:00	・3つのサブグループの成果を共有するためのミーティング（調査地のカフェ）
15:30～17:00	・3つのサブグループの調査報告と調査成果の共有化と問いを構造化するためのゼミ（質的フィールドワークの特徴とその方法論の再確認のためのレクチャーも含む）（フエ大学）
3月8日	
07:30～10:00	・集落調査グループのサブグループごとの地域調査（2回目）
10:00～11:00	・3つのサブグループの成果を共有するためのミーティング（調査地のカフェ）
14:00～16:00	・3つのサブグループの調査報告と調査成果の共有化と問いを構造化するためのゼミ（フエ大学）
16:30～17:30	・調査対象の小売店の商品の仕入れ先のひとつのアンケート・マーケットの視察
3月9日	
08:00～15:00	・調査結果の報告会プレゼンテーションの準備（昼食を食べながら作業）
15:00～17:00	・調査結果の報告会

写真３　飲み物屋

（2012 年 3 月　日撮影）

写真４　飲み物屋での調査

（2012 年 3 月　日撮影）

写真５　食堂・雑貨屋・理髪店が一体となった店

（2012 年 3 月　日撮影）

写真６　食堂・雑貨屋・理髪店が一体となった店での調査

（2012 年３月７日撮影）

写真７　バインベオ

（2012 年３月７日撮影）

写真８　バインベオ食堂

（2012 年３月７日撮影）

３グループの調査事例は次のとおりである。便宜上，ここではそれぞれA，B，Cグループとする。Aグループは外国語大学の正門近くにある飲み物屋（写真3，写真４），Bグループは食堂･雑貨屋･理髪店を同一の敷地内で営む店（写真5，写真６），をそしてCグループはバインベオ（Bánh Bèo）というベトナムの朝食（写真７）を提供する食堂（写真8，写真９）を調査した。いずれも家族経営の小さな店舗である。日本人の学生の質問をベトナムの学生が通訳し，またベトナムの学生も適宜質問をするという形式で聞き取り調査を進めた。

写真９　バインベオ食堂での調査

（2012 年３月　日撮影）

c. それぞれのグループの問いと仮説の形成

このように３つのサブグループがそれぞれ特定の小売店を選定し，その事例調査を実施した。サブグループごとの実質的な地域調査は３月７日と８日のそれぞれの午前中に合計２回実施された(表５のアンダーライン部分)。当初はフィールドワークの時間を午後にも設定していた。しかし，連日35度を超える猛暑とおたがいに得意ではない英語でのコミュニケーションが続いたため，心身共に学生のストレスが大きくなっていった。そこで調査自体は午前中のみにし，午後は各グループが得たデータに基づくディスカッションの時間をより多く設けた。それは，ある意味意図せざる効果と言えるだろうが，質的調査における「問いの構造化」について日本とベトナムの学生がともに深く悩み，考えることができる大変よい訓練の時間になった。

写真 10　ゼミの様子

（2012 年３月　日撮影）

このような経緯で３月７日と８日の両日の午後，まとまった時間を確保してゼミを実施した(写真10)。既に述べたように，共通の質問として，当該小売店の歴史，店の担い手，売られている商品，客について，将来の願いを設定した。ゼミ

ではこれらの基礎項目に関して得られたデータを共有し，その事実からどのような意味のある問いを立てることができるのか，ともに考えた。同じデータにもとづいてともに考える経験そのものが大変重要だった。また，自分が得たデータを他者にきちんと伝えることは，報告者自身の思考の整理に役に立つこととなった。さらにはこのような基礎的訓練を英語でしなければならなかったことも，学生にとって貴重な経験になったことだろう。

初めて訪れた地域で（しかも外国で），学生たちは文字通り試行錯誤しながら自分が見たリアリティを描き，そこから自分なりの問いを立てようと格闘した。その結果，3日間の調査とゼミをとおして各グループが立てた問いは次のとおりであった。

Aグループは外国語大学の正門近くに立地する飲み物屋を調査した。そこでは店の経営者と店に来ていた外国語大学の学生への聞き取り調査を実施した。この店の歴史を調べ，そして店の担い手と客への聞き取り調査をとおして日本人学生が立てた問いは次のものである――「この飲み物屋には飲み物を提供するということ以外の重要な機能があるらしい。それはどのような機能だろうか」。そしてこの問いに対する自分なりの仮説は「この店の機能は単にソフト・ドリンクやコーヒーを提供することにとどまるものではない。この店にはいろいろな人たちをつないでいく潜在的機能があるのではないだろうか」というものだった。

そしてさらに「なぜこの店は様々な人たちをつなぐことができるのだろうか」と問いはさらに深化した。そしてその問いに対して，人びとのフレンドリーさと（店の）子どもの笑顔にはコミュニティを形成するための隠された大きな力があるのではないか，という仮説を立てた。この仮説に関する実証的調査は時間の都合上することができなかった。この問いと仮説は，「〈地域づくり〉は制度をつくることによって可能になる」と，制度設計のみを過信していた自分自身と日本社会への反省であるとこの学生はいう。

Bグループは，家族でつつましく経営されている食堂・雑貨屋・理髪店を同一の敷地内で営む店の歴史，店の経営状態，後継ぎのことなどを調べた。それをとおして日本人学生が立てた問いは「彼らは決して金銭的には豊かではないし，顧客もそれほど多いとは言えないのに，なぜ店を経営しつづけることができ，そして『今の暮らしに満足している』と言えるのだろうか」というものだった。そしてこの問いを立てることによって，自分が本当に問うているのはベトナムの村の小売店ではなく，自分が生きている日本の状況であることに学生は気付いていった。すなわち，このベトナムの小売店は，店舗を経営するためには大きな金銭的資本やスキルを必要とされるだろう日本のリアリティ（そしてそれでも経営が成功するとは限らない）を照射することになったという。そしてこの学生はこの調査の仮説として次のことを問う。「資本の論理に追いまくられて生きる日本人に比べてベトナム人は幸福そうに見える。それはベトナムの農村は日本ほどに市場経済に依存していないからではないだろうか」。もちろん今回はこの仮説を実証的に検証することはできなかった。

Cグループはバインベオ（Bánh Bèo）というベトナムの朝食を提供する食堂を調査した。学生がこの店で感じた素朴な疑問は「自分はこのような小さな店が存続するのをこれまで見たことがない。ここではなぜこのような小さな店が生き残ることができるのだろうか」というものだった。この小さな店がこの地域で60年間続いており，そして次とその次の後継者も決まっているという発見が「ベトナムの村ではなぜこのような小さな店が長い間生き残れるのだろうか」という問いにつながった。その問いに対する仮説は「この店のローカル・ネットワークと店主の願いによってこの店が継続しているのではないか」というものだった。「ローカル・ネットワーク」は「地元の住民，学生，訪問者」から形成されるとこの学生は考えた。そして店主が「この店を経営しつづけることは家族

を支えることそのものである」と迷うことなく信じていることも，もの店が生き残っている大きな理由ではないか，という。

この学生の関心も，ベトナムの小さな食堂をとおして自分の社会（日本社会）へと向かっていたのは興味深い。地元の客の足が遠のき，小さな店が生き残るのが難しく，「シャッター商店街」が増えている日本の現状を考えるヒントとして，このベトナムの事例はとらえられ始めていた。

2．自然環境に関する調査の実際

a．調査準備

筆者のうち永松がフエ市を訪問したのは，フエ科学大学との交流をすすめる目的での訪問（永松ほか2010）に続き，２度目だったが，グビン山は訪れたことがなかった。出発前には，グビン山に関する知識がなく，想定した実習内容が現地で実施可能かどうかは判断できなかった。実習内容は，現地の状況に合わせて柔軟に変更するつもりでフエに到着した。

調査日程は表６のとおりであった。３月６日，本稿の筆者の一人であるフエ科学大学のトゥが，調査場所として設定されたグビン山についてのレクチャーを行った。フエのシンボル的な山であるグビン山は，ベトナム戦争終結後の1976年にマツが植林され，林齢は36年，面積14.5haと今回の調査に適した人工林との印象を持った。

表６　自然環境調査グループの実習日程

日時		実習内容	日本側とベトナム側の協力体制
3月6日		集落社会調査グループと同様	
3月7日	7:30	タクシーでホテルを出発 グビン山で，グループ集合	
	8:00-9:00	現地を歩きながら調査場所を選定	
	9:00-12:00	現地で永松が解説しながら実習（1カ所目）	合同で実施
	12:00-14:00	野外で昼食と休憩 実習内容についてディスカッション	合同で実施
	14:00-15:30	実習（2カ所目） 日本人学生Aが調査リーダー	合同で実施
	16:00	フエ科学大に帰着，打ち合わせ	合同で実施
3月8日	7:30	タクシーでホテルを出発 グビン山で，グループ集合	合同で実施
	8:00-9:30	実習（3カ所目） 日本人学生Bが調査リーダー	合同で実施
	9:30-10:30	実習（4カ所目） 日本人学生Cが調査リーダー	合同で実施
	10:30-14:00	ミーティング，昼食，休憩など	
	14:00-19:00	海岸砂丘ミニ・エクスカーション その後，グループで夕食	合同で実施
	19:30-21:30	ホテル内でミーティング データ入力，プレゼン打ち合わせ	日本側のみ
3月9日	8:00-15:00	プレゼンテーション準備 調査結果のとりまとめ 個人ごとの感想とりまとめ	日本側とベトナム側別々 特に打ち合わせはなし
	15:00-17:00	報告会	日本側3人 ベトナム側2人発表

午後，集落調査グループと合同で現地の下見に出かけた。グビン山は，大学から車で15分ほど，標高105mで山麓は一面が墓地となっており，中腹より上はマツの人工林に覆われていた（写真11）。グビン山の周囲を一周したところ，ほぼ全山がメルクシーマツ 3LQXVPHUNXVL人工林で，条件をそろえて調査点間の比較を行うのに好都合と思われた。下層植生の状況など日本のアカマツ林と適度に違いがあり，日本での調査を経験した学生がベトナムの人工林との違いを考察するにも適した場所であった。グビン山は山頂まで踏み分け道があり10分程度で山頂まで登れる丘であるが，山麓に広く墓地が広がるためか登る人はみられず，外国人が目立たずに調

写真 11　グビン山のマツ林

（2012 年 3 月 6 日撮影）

査しやすい点も，実習に好ましく思われた。

実習の実施に関しては，想定外の点もあった。出発前，植物のわかるフエ科学大学のスタッフと学生に実習時の帯同をお願いしていた。この希望に対してこの日，生物学部講師と学部４年生の学部生からサポートをいただけることがわかった。加えて地理地質学部スタッフ，大学院生，学部生が実習に帯同してもらえることがわかった。スタッフを含めて今回の実習に関心を持ってもらえるのは心強かったが，日本人学生３名に対する実習しか考えていなかったため，ベトナム側参加者への準備ができていなかった。例えば，調査票は数が足りない上にすべてが日本語のみ，という状態であった。コピーの依頼や都度の英訳など，現地で対応可能な内容ではあったが，様々な状況を想定しての事前のしっかりした準備がなにより重要であることを改めて実感した。下見のあとは自然環境グループ内で顔合わせをおこない，翌日の調査スケジュールなどを打ち合わせた。

写真 12　調査道具の解説

（2012 年 3 月 7 日撮影）

写真 13　実習のようす

（2012 年 3 月 7 日撮影）

写真 14　昼食のようす

（2012 年 3 月 7 日撮影）

写真 15　海岸砂丘エクスカーションのようす

（2012 年 3 月 8 日撮影）

b. 調査

３月７日朝，幸いにも天気は薄曇りであった。ベトナムの朝は早く，現地の習慣にあわせて７時半に出発し，タクシーに分乗して現地に向かった。現地に到着後，まずはグビン山の山頂まで登ってフォン川沿いに広がるフエ市街地の景色を堪能した。山頂部で調査適地を選定し，午前中は永松が調査票にしたがって調査目的や調査内容を説明しながら実習を進めた。日本側とベトナム側への同時解説は，説明すべき内容に違いがあり，あまりスムーズにはいかなかったが，ひとつひとつ実際に体験して疑問を解決するスタイルで調査を進めていった（写真12）。植物名については，生物学部講師と学部４年生の学部生にサポートをいただいた（写真13）。ベトナム側を含め全員で分担して測定をすすめ，午前中いっぱいかかって，1カ所目の調査を終えた。

昼食は，前日に依頼してベトナム側にパンや果物などの軽食を用意してもらった。グビン山のメルクシーマツの木漏れ日の下，みんなで輪になってピクニック気分の楽しい昼食となった（写真14）。時間をもてあますことを心配しながらも，ベトナム側のやり方に従って昼食とその後の休憩には２時間をあてた。ところが昼食後もあちこちに会話の輪ができ，日越文化談義に花が咲いて２時間の休憩はあっという間に終了した。野外のリラックスした雰囲気がプラスにはたらいた面もあろう，貴重な交流の場になった。

１カ所目の調査で全員が調査の流れを理解した。以後は調

査場所を変えて，同じ調査を繰り返し，場所による違いを検討することにした。調査場所ごとに，日本人学生３人が一人ずつリーダー役となり，グループ全員に指示を出して調査をすすめた。永松はできるだけ口をださないこととした。日本で実習を経験した学生から順にリーダーをつとめ，翌８日の午前中にかけて３人全員がリーダー役をこなし，計４カ所の調査を終えた。１カ所目の調査ではベトナム側から多くの質問が出たが，次第に細かな部分まで理解が進み，回を追って調査はスムーズに進行するようになった。

グビン山での調査は，できる限り多くのデータを取ることが目的ではない。当初の目的であったグビン山のメルクシーマツ人工林の状況把握と，日本人学生による海外での野外調査がひととおり達成できたため，計画にはなかった次の展開を欲張ることにした。ベトナム側と相談をして，グビン山での調査は３月８日午前で終了し，午後，タクシーを使ってフエ市郊外のラグーン（潟湖）外側海岸砂丘にでかけた。フエ市には，東南アジア有数の大きなラグーンがある。訪問は，永松がとり組んでいる鳥取砂丘の植生管理に同期した研究テーマや実習テーマを探索することが目的であった。調査には事前申請が必要なため，今回は単なる観光として出かけた。市街地から片道30分ほどで海岸に達し，南シナ海沿いの小砂丘地と海浜植生および海岸緑化のようすを見学した（写真15）。想像していたよりも規模は小さかったが，海浜植生については日本との共通種をみつけることができた。実習や研究など次の展開を考えるには，もう少し周辺を歩き回ることが必要と考えられた。しかし，美しい海と鳴り砂の組み合わせに，学生にはリラックスした時間となったはずである。

c. 調査とりまとめ

報告会での報告内容については，学生の興味やスキルに応じて報告内容を分担することを構想し，実習中に少しずつディスカッションを進めた。報告会をどのように構成するかは，事前にはほとんど打ち合わせができていなかった。例えば，ベトナム側からも発表してもらえることは，実習途中に知った。集落調査グループとの調整に加えて，自然環境グループ内でベトナム側と分担しながら報告準備をするには時間とコミュニケーションが足りないと判断して，今回の実習に関するデータのとりまとめは日本側で行うことにした。英語の調査資料を事前に準備していれば，ベトナム側をとりこんでとりまとめができた可能性があり，この点は次回に向けた反省点である。

調査が終わった３月８日の夜，3人の学生を集めてホテル内で打ち合わせを行い，学生の希望も見極めながら報告の分担内容について話し合った。調査データのPCへの入力もこの打ち合わせ時に行った。具体的なプレゼンテーションファイルの作成にはいる９日朝までに，報告内容の骨格を各自でまとめるように指示して，この夜の打ち合わせを終了した。

３. 現地報告会

集落社会グループでは，2日半の地域調査とディスカッションを経て，3月９日には半日間のプレゼンテーションの準備作業をし，その日の午後に報告会を実施した。集落調査グループの報告は次のような構成でなされた。

・集落調査グループの調査の目的と調査方法の紹介（鳥取大学教員）
・調査地の概要（フエ科学大学教員）
・学生の調査報告（Aグループ・Bグループ・Cグループ）
・まとめ（鳥取大学教員）

集落調査グループの日本人学生の調査から導き出された問いと仮説は既に述べたとおりである

が，改めて次に一覧にして整理する。

日本人学生の地域調査の成果として興味深いことは，表７からもわかるように，ベトナムの村の事例調査でありながら，結果的にはその調査事例が鏡となって日本社会が照射される問いと仮説を立てたことだ。ベトナムの村の調査は，自分たちの社会を相対化し，再考する大変重要な機会になったと思われる。

表７　集落調査グループ内のサブグループの調査概要

グループ	調査対象	報告タイトルと問い	仮説
Aグループ	外国語大学の正門近くに立地する飲み物屋	報告タイトル：Drink shop makes human relationship 問い：この店は単にソフト・ドリンクやコーヒーを販売する店にとどまるものではない。この店にはいろいろな人たちをつないでいく潜在的機能があるのではないか。	店の人びとのフレンドリーさと（店の）子どもの笑顔には人をつないだり，コミュニティを形成するための隠された大きな力があるのではないか。
Bグループ	食堂・雑貨屋・理髪店が一体となった店	報告タイトル：Which one is happier, Japanese or Vietnamese? 問い：彼らは決して金銭的には豊かではないし，顧客もそれほど多いとは言えないのに，なぜ店を経営しつづけることができ，そして「今の暮らしに満足している」と言えるのだろうか。	市場経済の論理に追いたてられて生きる日本人に比べて，ベトナム人は幸福そうに見える。それはベトナムの農村は日本ほどに市場経済に依存していないからではないだろうか。
Cグループ	Bánh Bèo 食堂	報告タイトル：Why does this store survive？ 問い：ベトナムの村ではなぜこのような小さな店が長い間生き残れるのだろうか。	この店と周囲の人びととのローカル・ネットワークの存在と，「店の家族継承が家族を支えることになる」という店主の強い願いがこの店が存続する大きなふたつの理由ではないか。

このたびの地域調査は，実質的には２～３時間ほどの調査を２回実施しただけであり，表７の仮説も大変乱暴なものと言わざるを得ない。しかしながら今回の実習の目的は自分の足で現地を歩き，インタビューによってデータを収集し，あくまでもデータにもとづいて自分の最初の素朴な疑問を意味のある問いに構造化していくことだった。この観点から考えると，学生たちのこのたびの実習は大変よい訓練の機会であり，大きな効果があったといえるだろう。

一方，ベトナムの学生たちのプレゼンテーションは，自分たちが地域調査によって得たデータを整理し，調査地および調査対象である小売店の概要を大変丁寧にまとめたものだった。今回参加してくれたベトナムの学生たちは質的な地域調査にはあまりなじみがなかったにもかかわらず，データを丁寧に整理し，それをとても適切に記述することができ，日ごろよく訓練されていて高い能力をもっていることがうかがえた。

写真 16　報告会準備の様子

（2012 年 3 月 9 日撮影）

自然環境グループの報告会準備作業は，3月９日に集中的に行った（写真16）。自然環境グループでは，全員が同一の実習を行ったため，報告のプレゼンテーションは内容を分けて分担することにした。

最初に教員が実習目的などの紹介を簡単に行い，実質的な内容の紹介を３人の学生に任せた。３人のプレゼンテーショ

ンは実習内容を紹介することを基本に組み立てた。まず日本で同様の実習を行っている２年生の学生が日本の森林についての紹介を担当した。続いて生態調査の経験がない２年生が，今回の調査方法と実習の実際に関する説明を担当した。最後に，永松の研究室で卒論研究を行う予定の３年生に，今回の調査結果と考察を担当してもらった。ベトナム側からは，これまで調べてきたグビン山の森の特徴について発表してもらった。

以上のような一連の実習内容紹介を基本に，プレゼンテーションでは，3人がそれぞれ今回の実習で印象深かった点を報告に加えて，各自が独立した報告となるように工夫した。発表内容は重なりがないようディスカッションを繰り返してすりあわせを行った。それぞれ，日本では見ない植物の例，日本との土壌の違い，そして滞在中の交流（写真17）への感謝について発表した。発表準備に際してはインターネットに接続できる環境を用意いただき，たいへん助かった。

写真１　学生同士の交流

（2012 年 3 月 10 日撮影）

午後３時からはじめた報告会には，実習に参加してくれた教員や学生など20名ほどの参加をいただき，たいへんありがたかった。学生は初めての英語でのプレゼンであったが，予想以上によくしゃべってくれた。苦労して英語の発表を行う貴重な経験となり，今後の自信にもなったのではないかと感じる。学生の感想からは，英語でのコミュニケーション能力の不足を反省する声があり，今後の努力のきっかけになればと感じる。

プレゼンテーション内容に関しては，ベトナム人学生の訓練度の高さと誠実さが印象に残った。日本側については，とりまとめとプレゼンテーションに関して調査実習発表会を未経験の２年生と，発表会をこなした３年生の違いはやはり大きかった。今後の海外フィールド演習実施については，この点を考慮する必要があるかもしれない。あわせて，よい報告を行うためにいくつかの改善点が考えられた。まずは渡航前の実習内容予習や報告会用パワーポイントの事前準備が必要である。自然環境グループでは，今回パソコンは1台しか持参しなかったが，よく準備された発表のためには，荷物にはなっても参加者全員のパソコンの必携が望ましい。

Ⅴ　パイロットプログラムの評価

１．参加学生の経験から

集落社会グループでは，帰国後の反省会を開き，主にプログラム全体，方法論，そしてベトナムの学生たちとの協働について振り返った。

まずプログラム全体については，英語でのコミュニケーションと質的調査法になれていなかったため非常にストレスフルな状態が続いたようだが，結果として大変いい経験になり満足していることがうかがえた。ある学生は「すごくつらかったが，とてもいい経験ができた」という。別の学生は「ベトナムで撮影された写真に笑っている自分自身がたくさん写っていて驚いた」という。それは本人が自覚していた以上にベトナムでの経験が楽しかったことを物語っている。

また「全体の日程が濃縮されていたのがよかった」あるいは「スケジュールが詰まっていたのがよかった。調査にはスピード感が大切」という意見もあった。その一方で，もう少し調査の時間を確保したかったというコメントもあった。たとえばフエ王宮見学などの観光的要素がプログラムに盛り込まれていたが，そのような時間をも調査およびディスカッションの時間に回した方がよいという意見すらあった。調査もさることながら，調査で得たデータについてのディスカッションの時

間をもっと確保できればよかったという声も聞かれた。これは質的地域調査になれていない学生がほとんどだったため，もっと学ぶ時間が必要だったのだと思われる。また日本人同士で議論する時間がもっとあればよかったという意見もあった。

調査法については，まず「自分自身の問いを立てるということが思った以上に難しかった」という素朴な感想が複数の学生にみられた。あるいは「最初はこんな小さな店を調べて何かがわかるのか戸惑った」という声もあった。しかしながら，実際に実習が始まると，「問いを立てることのむずかしさ」を感じる一方で「誰かが立てたのではなく，自分自身の問いを追究することがおもしろかった。そして自分で立てた問いだから，その調査の結果をみんなに聞いてほしくて報告に力が入った」という感想も聞かれた。日本の学生にも質的地域調査の難しさと面白さは経験されたようである。問いを深めるために「あわただしかったのでもっとじっくり考える時間がほしかった」とか「一日の終わりにその日のデータをまとめる時間がほしい」というコメントもあった。時間配分や技術的な改善点は多々あるものの，質的地域調査の経験は学生にとって大変意義のあるものだったようである。この経験をより実のあるものにするためには，この調査法に関する事前のレクチャーを日本・ベトナム双方の学生に実施することが必要かもしれない。

また，日本人ひとりにつきベトナムの学生が２名ついてくれたのは非常によかったという意見が多かった。現場では，時にベトナムの学生同士でベトナム語のみでの議論を続けてしまい日本人学生が途方に暮れる場面も見られたが，この組み合わせは今後もぜひ続けてほしいという要望が強かった。

写真 18　空港で別れを惜しむ日本とベトナムの学生

（2012 年 3 月 10 日撮影）

この実習でもっとも実りあったことのひとつとして，日本・ベトナムの学生の間に連帯感や仲間意識が徐々に芽生えてきたことも挙げられるのではないだろうか。調査をとおしてともに苦労するという経験を共有することにより，1週間後には別れがたい友人同士となっていた（写真18）。いうまでもなく調査の訓練そのものはこの実習の一義的な目的であるが，海外に友人ができることもこの実習の貴重な成果と思われる。それも苦労をともにするというプロセスを経てできた友人なら，その絆はより一層強いものだろう。

自然環境グループでは日程があわず，帰国後に反省会は開けなかった。しかし個別に，あるいは感想文としてさまざまな意見を得た。

ベトナム側学生の積極的な姿勢のおかげで，学生交流は想像していたよりもずっとうまく進み，学生たちはこの点に関してある種の感動をえた。ふだん日本人以外との交流が少ない鳥取大学の学生にとって，実習中の共同作業や自主的な交流で感じたベトナム人学生との一体感は，これからの人生に影響を与える貴重な体験となるに違いない。

学生たちは，ベトナム側の明るい笑顔とバイタリティに強い刺激を受けたようだ。学生の一人は，我々はもっと元気を出して毎日を過ごしていくべきだとの感想を寄せた。海外フィールド演習は，学生に幅広い効果を与えている。実習の１週間があっという間だったという感想は，本プログラムが成功であったことを端的に物語っている。

実習内容について，自然環境グループの実習内容を日本ですでに経験していた学生は，日本で調査した森との違いについて興味をよせた。海外フィールド演習が意図している目的を達成した点と

いえる。また，日本で同様の実習を受けていない学生からは，違う分野の実習を経験することで自らの関心や視野が広がったとの感想があった。

筆者らの準備不足により，事前に実習内容が固められず，今回のプログラムでは，学生への事前実習が足りなかった。次回に向けて，事前実習の量と質の改善が必要である。さらに，今回は調査票が全て日本語であるなど，ベトナム側への情報提供も不足した。今回のように受け入れ側と一体化した実習が実施できるのなら，実習前に現地で受け入れ側に向けて調査目的や方法についてのレクチャーを行う必要があるだろう。

学生交流についても同様に準備不足がいえる。自らの気持ちを伝える，あるいはコミュニケーションの小道具として，学生それぞれがちょっとした日本のおみやげを準備することが望ましい。そのような点に関しても，事前指導が必要であろう。

2. ベトナム側からのフィードバック

今回のパイロットプログラムの特徴の一つは，日本人学生と共同で調査を行い，また通訳を担うことも目的として，フエ科学大学からも学生などに参加をしてもらったことが挙げられる。筆者らは，パイロットプログラム終了後にベトナム側参加学生に自由記述式のフィードバックシートを英語およびベトナム語で記してもらった。その内容の一部を紹介する。

まず自然環境に関する調査については「森の健康診断」という，ベトナムでは初めてのプログラムであったためか，その方法に対する驚きが述べられることもあったが，短期間に調査方法を習得でき，かつある程度の成果を得られたことから達成感を感じられたとするフィードバックコメントが見られた。「森の健康診断」では専門的な調査機材は用いず，100円均一ショップなどで市販されている道具を組み合わせて調査機材とするが，生物学部の学部生からは，通常使う調査機材とは違うものであったがその趣旨を理解して肯定的な意見が挙げられた。ただし，マニュアルの文章が日本語のみであったため，この部分では改善を求めるコメントもあった。

集落社会に関する調査では，通常，定性的な調査が一般的ではない地理地質学部の学部生，修士学生には大変新鮮であったようである。そもそもベトナムの地理学は，永松ほか（2010）でも述べたとおり計画経済を下支えしてきたソ連型社会経済地理学とソ連型自然地理学が本流であり，いずれも定量的なデータに基づく研究が主である。大学教育もそれにのっとって行われるため，いわゆるインタビュー調査が行われることは必ずしも多くなく，その調査能力については欠如しているといわざるを得ない。今回のパイロットプログラムでは，実際に調査に行く前に定性的調査のミニ講義（写真19）を行ったこともあり比較的よく理解はなされたと思われる。ただしコミュニティ（集落社会）の概念に違和感をもつ学生もいて，たとえば今回，調査対象としたコミュニティよりも広範な「地域」を理解する必要はないかという意見を書いた学生もあった。

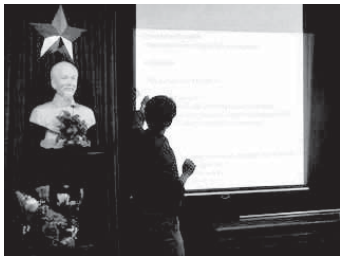

写真 19　質的地域調査のミニ講義

（2012 年 3 月　日撮影）

Ⅵ　おわりに―成果・課題・展望―

本稿では2010年の韓国・江原大学校に続く２回目の海外フィールド演習のパイロットプログラムの報告を行った。韓国とは異なり，ベトナムという国の事情を色濃く反映したプログラムの実施となった。例えば，調査を実施するにあたっての諸手続きが煩雑な社会主義国であるがため，学生指導を主とする引率教員（今回のパイロットプログラムでは仲野と永松が担当）とは別に全体調整を行う引率教員（筒井が担当）も必須であることが確認された。またフエ科学大学には日本語を解する教員，学生はほとんどいないため，すべてにおいて最低でも英語でのコミュニケーションが必要となる。これ自体は「困っても日本語は使えない」という環境が，語学力ではないコミュニケーション能力を醸成するにはいい環境であるといえるかもしれない。

海外フィールド演習はおおよそ１週間程度の短期間で実施されるため，「調査」自体は不十分なものにならざるを得ない。しかし海外で慣れない言葉を使い，異なる文化をもつ同世代の若い人たちとともに考え，苦労することは，学生たちがこれから学び，働き，生きていくうえでの大切な糧となるだろう。さらにこのような経験は間違いなくインターリージョナルな視点を獲得できることにつながる。インターリージョナルな視点は，この時代における地域のダイナミズムやリアリティをとらえる上でも重要な視点になりうると考えられる。一方で課題も見えてきた。日本側学生とベトナム側学生との間で，言葉や調査法の相違をめぐってノイズやストレスが発生することは大切ではあるが，プログラム前の事前学習をある程度設定した方が，より調査の訓練効果が高まると思われる。また，事前学習とともに，特に日本とベトナムの教員による実習に関する事前打合せの時間をもう少し確保した方がプログラムの基本的土台を相互により理解したうえでスタートすることができるのではないかと考えられる。

ところで，今回の海外フィールド演習では学生実習とは異なる面での成果の萌芽がみられた。自然環境に関する調査での「森の健康診断」も，集落社会に関する定性的調査も，ベトナムでは一般的なものではない。フィードバックコメントからも分かるように，フエ科学大学の学生やスタッフは，当初これらの調査方法に戸惑った部分が大きかったと推察されるが，日本側スタッフ，学生とともに「実習」を行うことでその真髄が何となく体感できたようである。今回の実習を終えたのちに，フエ科学大学からは海外フィールド演習の実施に合わせて，地域学部で展開されている様々な調査法の講義を企画してほしいとの依頼を受けている。地域学教育における地域調査手法は分野によって異なるものではあるが，各種の調査手法が「地域学」という傘の下でまとめ上げられ，それに海外の大学が関心を持ってもらえるということは「地域学教育の輸出」の可能性があることに他ならない。地域学部が創設されて９年目に入ったが，「地域学教育の輸出」という攻めの国際戦略を検討する時期に入っているようにも思える。

文部科学省を中心に「グローバル人材育成推進」が進められている。グローバル人材とは何かという定義は難しいが，「はじめに」で述べた，海外の地域課題の解決や地域発展に向けた諸活動を，その地域の関係機関や人々と協働して実践し，その地域の再生や発展に貢献する国内外を問わないインターリージョナルな活動ができる協働人材も，一種の「グローバル人材」といえるであろう。地域学部の「地域」はとかく国内ととらえられがちである。しかしそれだけでは不十分である。繰り返しになるが，インターリージョナルな人材の重要性が高まっている。そのためにも，地域を見つめる目の複眼化した地球地域学を見据えた地域学教育が求められているのである。

謝辞

ベトナム・フエにおける「海外フィールド演習」パイロットプログラムの試行においては平成23年度鳥取大学学長経費「地域学部「海外フィールド演習」創設に向けた調査と試行」および「地域学部における国際交流委員会を中心とした国際交流事業の体系化と新展開（トップマネジメント経費）」の助成を受けた。また学生の渡航費用については鳥取大学地域学部助成会から１名あたり３万円の助成を得た。フエ科学大学のグエン ヴァン タン（Nguyễn Văn Tận）学長，グエン ヴァン ホップ（Nguyễn Văn Hợp）科学技術国際交流室長，チャン フー トゥイェン（Trần Hữu Tuyên）地理地質学部長，チュオン ディン チョン（Trương Đình Trọng）同副学部長には本パイロットプログラムの実施に当たって様々な便宜をはかっていただいた。記して御礼申し上げます。

引用文献

小笠原 拓（2010）：春川教育大学校との短期学生交流事業―地域教育学科を中心とした国際交流の取り組みとして―，『地域教育学研究』2-1：24-29.

蔵治光一郎・州崎燈子・丹羽健司（2006）『森の健康診断―100円グッズで始める市民と研究者の愉快な森林調査―』築地書館.

佐藤郁哉（2002）『フィールドワークの技法―問いを鍛える，仮説を育てる―』新曜社.

田川公太朗・永松 大（2010）：韓国江原大学校における「海外フィールド演習」のこころみ，『地域学論集』7：323-336.

永松 大・田川公太朗・筒井一伸・中村英樹・関 耕二・グエン クアン トゥアン（2010）：ベトナム・フエ科学大学との学術交流展開に向けて，『地域学論集』7：141-155.

Thorpe Todd (2009)：“The Asian Youth Forum International Summit: Exploring Asia in a Week”，『文学・芸術・文化（近畿大学文芸学部）』21-1：68-59.

（2012年６月７日受付，2012年６月15日受理）